

**P1-28-2** 子宮内腔の変形を伴わない子宮筋腫合併不妊症における腹腔鏡下子宮筋腫核出手術の意義

大阪医大

中野紗也香, 山下能毅, 岡本敦子, 広田千賀, 佐野 匠, 藤山史恵, 八田幸治, 鈴木裕介, 川邊紗智子, 田辺晃子, 奥田喜代司, 大道正英

【目的】子宮内腔を変形させる粘膜下筋腫は、IVFの着床率、妊娠率を明らかに低下させるため、子宮鏡による子宮筋腫核出手術が推奨されているが、子宮内腔の変形を伴わない筋層内筋腫のIVFの成績および、妊孕性への影響については議論の余地がある。【方法】今回我々は、2005年から2009年までに子宮筋腫合併不妊症に対して腹腔鏡下筋腫核出手術(LM)を施行した78例を対象に、摘出個数、大きさ、部位別の妊娠率、その後の治療の有無、妊娠までの期間などをretrospectiveに検討した。【成績】平均年齢は $35.0 \pm 3.2$ 歳、平均不妊期間は $57.5 \pm 32.5$ ヶ月であった。平均核出個数は $2.0 \pm 0.2$ 個で、子宮筋腫の内訳は、子宮内腔の変形を伴うものが4例、3個以上の多発性筋腫が11例であった。術後妊娠例は60例で、自然妊娠が28例、AIHが9例、IVFが23例であり、自然妊娠例では1年以内の妊娠が85.7%(22/28)であった。多発性筋腫では11例すべてが妊娠し、筋層内筋腫核出後では、71.1%(48/67)が妊娠し、内腔変形のない核出後でも69.8%(44/63)が妊娠した。【結論】子宮内腔の変形がない筋層内筋腫でも手術後に高い妊娠率が得られ、とくに自然妊娠例の85.7%が1年以内に妊娠していることから、LMがARTに至る前の治療の選択肢の一つになる可能性がある。

**P1-28-3** 初診時の喫煙および禁煙の有無が生殖医療に及ぼす影響について亀田メディカルセンター不妊生殖科<sup>1</sup>, 亀田メディカルセンター<sup>2</sup>  
己斐秀樹<sup>1</sup>, 大内久美<sup>1</sup>, 高木清考<sup>2</sup>, 古澤嘉明<sup>2</sup>

【目的】喫煙は生殖に悪影響を与えるが、本邦においては十分な啓蒙がなされていない。臨床データをもとに、生殖医療における喫煙の弊害を明らかにすることを目的とした。【方法】当院不妊生殖センターを2005年1月から2009年12月までに初診した女性患者1071名の中で、初診時に喫煙および喫煙の既往が確認できた963名を対象に、その後の臨床経過、成績を後方視的に解析した。【成績】初診時年齢は33.6歳(20-46歳)で、喫煙中が200名(20.8%)、最近禁煙(6月未満)が21名(2.2%)、喫煙の既往が83名(8.6%)、喫煙歴なしが659名(68.4%)で全体の31.6%が喫煙の経験があった。喫煙歴なしの割合は、34歳以下(563名)では66.1%、35歳以上39歳以下(281名)では69.4%、40歳以上(119名)では79.0%と年齢とともに増加した。喫煙歴なしの314名(47.6%)で362妊娠が成立し、流産76妊娠(流産率21.0%)、子宮外妊娠3妊娠(0.8%)であった。既往の37名(44.6%)で40妊娠が成立し、流産3妊娠(流産率8.1%)、子宮外妊娠1妊娠(1.2%)であった。最近禁煙の13名(61.9%)で15妊娠が成立し、流産2妊娠(流産率15.4%)、子宮外妊娠はなかった。喫煙中の69名(34.5%)で79妊娠が成立し、流産9妊娠(流産率11.3%)、子宮外妊娠4妊娠(5.0%)であった。喫煙中では他と比し有意に妊娠率が低く、子宮外妊娠の発生率が高かった。妊娠をされていない場合の治療継続率は、喫煙なしで34.8%、既往で34.8%であったが、喫煙中は19.8%で有意に低かった。【結論】喫煙の有無は妊娠後に影響を与えるだけでなく、禁煙に対する姿勢で治療の継続性に影響を与える。喫煙の防止および禁煙の必要性に関する啓蒙活動が必要である。

**P1-28-4** 両側性もしくは重症のチョコレート嚢胞の術後には血清AMHの値は低下する

名古屋大

眞鍋修一, 岩瀬 明, 中村智子, 廣川和加奈, 中原辰夫, 小林浩治, 滝川幸子, 後藤真紀, 吉川史隆

【目的】AMH(anti-Mullerian hormone)はARTにおける採卵数等の予測因子のみではなく、手術、化学療法等による卵巣予備能変化の評価法としての有用性が期待されている。今回我々は、卵巣チョコレート嚢胞に対する手術が卵巣予備能に及ぼす影響について術前、術後の血清AMH値を用いて検討したので報告する。【方法】当院倫理委員会の承認のもと、2008年1月から2010年5月までの間で、インフォームドコンセントを得たチョコレート嚢胞摘出手術38例(片側のチョコレート嚢胞20例、両側のチョコレート嚢胞18例)について術前後に血清AMH値を測定し検討した。対象は[1]月経周期を有する18歳から45歳の女性で他の内分泌疾患をもたず、[2]以前に付属器の手術既往がなく、[3]卵巣の悪性腫瘍の疑いがなく[3]手術前3カ月の間に経口避妊薬の内服がない患者とした。手術は気腹式で行い嚢胞壁を正常卵巣組織より鉗子にて剝離し出血部は必要最低限バイポーラー鉗子にて止血した。術前の採血は手術の二週間前に行い、術後の採血は1カ月後に行った。血清AMH値はIMMUNOTCH社のキットをもちいてELISAした。【成績】術前後のAMH(ng/ml, mean $\pm$ SD)はそれぞれ3.9 ng/ml, 2.1 ng/mlであった。AMHの減少率は両側性の方が片側性と比較して有意に高かった( $62.8 \pm 29.6\%$  vs.  $24.7 \pm 32.5\%$ ,  $P < .001$ )。血清AMH値はrASRMの値と有意な相関関係を認めた( $p = .00273$ )。しかし年齢、卵巣腫瘍計、手術中の出血量、摘出検体の卵胞数は相関関係を認めなかった。【結論】今回我々の結果は両側性のチョコレート嚢胞手術と、片側性でもrASRMスコアが高い患者のチョコレート嚢胞手術は卵巣予備能を低下させる可能性を示唆した。